

2021年5月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 56

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

持続的な技術移転の 模索ーパキスタン・ シンド農業大学主催 の防災研修を実施し ました

わたしたちは、外務省NGO連携無償資金協力の助成を受け、パキスタン南部シンド州において干ばつ対策の事業を実施しています。本事業では、特に自然災害リスク評価、リモートセンシング画像解析、地下水汚染調査・対策、井戸施工管理、水源維持管理、環境データ観測、水文地質等における技術移転を重要視し、パキスタン国内で災害リスクを見極め、効果的なソリューションを持続させることを目的としています。

この技術研修においては、今年初めにシンド農業大学と提携を結び、日本側の専門家による技術移転を現地関係者（行政機関、専門研究機関、NGO等）に行うことに合意しました。具体的には、シンド農業大学で技術移転研修を行うこと、その際にシンド農業大学の施設や機材も活用すること、そしてシンド農業大学に将来的に本事業で取り扱っている技術を教えられる人材を、事業終了時まで養成することを目指しています。シンド農業大学は学生のみならず、外部に開かれた学術機関になることを意識し、農業に関する様々な調査を実践にまで繋げられるよう、対象地ウマルコート市内に研究所を設立するなどし、積極的に外部との連携を展開しています。

OUR SNS IS ACTIVE!

FACEBOOK

TWITTER

INSTAGRAMでも
情報発信しています!

最後のページを
ご覧ください



この協力の第一ステップとして、防災研修をシリーズ化して実施しました。今回扱った主なトピックとしては地下水を理解する上で重要な水門地質学、電気探査、電気探査、電気の比抵抗差、電気探査における最新技術、地下水探査の方法、井戸の掘削状況の報告、地下水の流れ方の記録、QGISを用いたマップ作成等です。

例えば、現地の地層情報は非常に限られているのですが、それを知ることによって、層状水、裂隙水の存在なども分かってきますし、安全な飲み水がどこから取れるのか、何故現在飲めない水と飲める水が出現しているのか、なども理解することが可能です。行政や現地農法研究所、大学やNGO等、様々なステークホルダーが干ばつ対策に関わっていますが、お互いの情報（例えばどの地点でどこまで掘ったらどんな地層が出てきた等）を効果的に共有し、そういった情報を広くオープンソース情報として提供出来れば、今後の地下水活用の効率性は飛躍的に上がります。

Stratum Water and Fissure Water

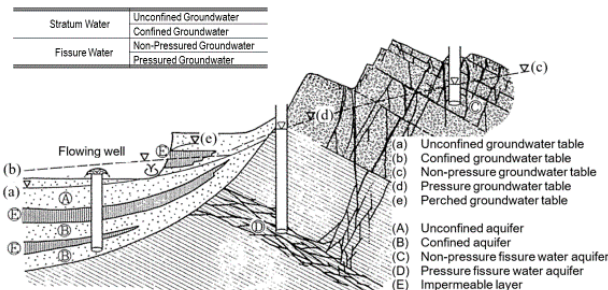


Figure Stratum Water and Fissure Water
Shim, Y.S., Jibouti Kagaku (Landscape Engineering), Senkaido, 1989.

3/9

写真:

パートナー企業である国土防災技術(株)様の研修資料より抜粋

わたしたちが対象としているシンド州ウマルコート付近はタール砂漠の西部に位置し、使用出来る水が大変限られています。何もない所から水を生み出すのは至難の業ですが、どこにどんな水があるか、それを持続的に活用する為にはどうしたら良いか、というサイエンスを現地コミュニティに伝えることによって、少しでも水不足が解消されると信じています。

そういった技術移転をシンド農業大学との協働で行えることは一同大変嬉しく思っています。

CWS Japanは現地の人びとと同じ方向を向いて、その課題解決に向けて共に取り組んでいきます。こうした地道な活動の一步一步は、CWS Japanを支えてくれている支援者の皆様の後押しがあるからこそ歩み進むことができます。引き続き温かい応援をどうぞよろしくお願いいたします。

(文: 事務局長 小美野剛)

STORY WITH OUR PARTNERS -パートナーの声

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年が経ちました。

CWS Japanはそこから10年間、ともに活動する仲間を増やし、多くの方々のご支援とご協力、温かいお言葉に支えられながら、国内外の災害・防災支援に携わることができました。その活動の多くは、わたしたち単独でできるものではありませんでした。当時から現在に至るまで、わたしたちがこだわっているのは「パートナーシップ」です。

今後も、同じもしくは他のセクターで活躍されているパートナーとの連携やネットワーク構築を通して、災害時に支援の手が届かず取り残される人々のいない社会の実現を目指していきます。

そのために、この10年という節目を迎え、これまでのわたしたちの活動によるインパクトを客観的に振り返るとともに、今後の活動に向けて、改善課題を抽出すべく、何名かのパートナーの皆様へインタビューをさせて頂きました。

パートナー団体 から聞くCWS JAPANとの歩み VOL.1

インタビュー相手：眞弓孝之 様
(国土防災技術株式会社
事業本部国際部部長)



—CWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

CWS Japanと関わるまでは、NGOとはほとんど関わりがありませんでした。防災という分野に携わっていますが、企業は最終的には利益を出すということを目的にしているため、NGOが持っている価値観とは異なると感じ、なかなか関わる接点がありませんでした。しかし当社にNGOでの勤務経験がある社員が入社してきて、NGOがどのように防災に取り組んでいるかということ伝えてくれました。最初はアルバイトでしたが、後に社員として定着し、私がNGOに関わるきっかけを作ってくれました。

—CWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

CWS Japanとの出会いは、まさに「目から鱗」でした。反省ではなく、猛省を強いられた思いでした。これまでの自分のキャリアでは、防災のコンサルタントであると自負して研鑽してきました。しかしCWS Japanと関わりNGOが目指している防災の考え方と私のそれが決定的に違っていたことに気付かされました。

"CWS Japanとともに防災に取り組むことになり、そこに「人」が介在しなければならぬことに気が付きました。"

私はそれまで防災とは、なぜその災害が発生するのかのメカニズムを理解し、例えば砂防ダム・防波堤などを作り、地すべり・土石流などの災害事象の発生を防ぐ、またはその規模を軽減することが防災という考えでした。その中に「人」という存在はありませんでした。しかし、CWS Japanとともに防災に取り組むことになり、そこに「人」が介在しなければならぬことに気が付きました。

今後も起こりうる災害において、全ての被害を完全に無くすことは非常に難しいと思います。しかし「人」が介在することによって、人の生命や身体への被害を軽減することはできます。防災というのは構造物・非構造物対策の両面で対応しなければいけないというに気がつくことができました。これは全ての防災に関わる人についていえることですが、構造物に対する安全神話に浸り切ったことになるのは恐ろしい。人々が、自然からの恩恵とともに脅威に晒されているという意識を持ち続け、それとどのように共存することができるかということを考えるのが防災だと感じました。CWSは地域レベルの能力強化だけでなく、政府・行政への政策提言やパートナーシップということに取り組んでいる。どれも「人」が防災の中心になっている。私が30年間見てこなかった視点を持っていました。今は、防災というのは皆さんと一緒に取り組むことで前に進んでいく分野であると思います。

ー防災支援・緊急人道支援で大切にしている貴社のアプローチや課題を教えてください

あくまで個人の意見ですが、まず企業だから「支援」という考えがなかった。これまで「業務」としてこなしていた。プロジェクトの成果を達成することで、利益を得ることが目的でした。言い方を変えれば、「モノ」を作ることが支援でした。日本のコンサルタントが、日本の技術を用いて調査、設計し、日本の業者が施工で入ってモノを作ってきました。実際のところ、現地に資源も能力も様式も基準も無い中で、日本で整備されているインフラなど作ることはできません。ましてや、このメンテナンスができるはずもありません。

"「ものづくり」から「ひとづくり」にシフトしてきたように思います。・・・現地と向き合うのではなく、一緒に同じ方向を見るという姿勢を大切にしています。"

こうしたことへの反省から、最近の政府の方針は「ものづくり」から「ひとづくり」にシフトしてきたように思います。その方針転換に際して、プロジェクトはマニュアル作り・ガイドライン作りにシフトしています。ただ、そこに書かれている技術は最先端のものです。また、こうした最先端の技術を現地も求めてくる傾向があります。なぜならそれは一見、楽そうに見えるからかもしれません。しかし、なぜこうした最先端技術を日本が維持できるかということ、それまでの歴史的経験や資源の積み重ねなど、これを下支えする土台があるからです。マニュアル作り・ガイドライン作りだけで、本当に正しい技術を伝えられているのだろうかと不安に感じる度が度々あります。そうした時には、現地と向き合うのではなく、一緒に同じ方向を見るという姿勢を大切にしています。最先端技術を上からそのまま落とすのではなく、現地が理解できる言葉で、実施できる能力に応じた技術を提供するといったカスタマイズが必要だと思います。現地の人びとと一緒に歩み、解決に向けて一步一步近づいて行くことが「支援」ということなのだと感じています。

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはありますか？

次々と新しいテーマに取り組もうとする姿勢に期待しています。CWS Japanは、様々な分野の取り組みに防災をつなげて考えています。防災は自然との対話だと私は考えています。この地球で行儀よく住まう術が防災だと思っています。だからこそ、防災は色々な分野と関連付けて考えなければならないと思います。色々な活動に取り組むためには、CWS Japanが組織としてももっと大きく成長することに期待しています。



インタビュー相手：中村清美 様
（国土防災技術株式会社
国際部事業企画課課長）

—CWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

CWS Japanを最初に知ったのは、2015年に仙台で開催された国連防災世界会議に向けた準備会合で一緒になった時でした。私は以前にNGOで働いていたことがあるのですが、防災・減災CSOネットワークを設立する際に、その頃の知人から参加の誘いを受けました。私たちは企業と言う立場ですが、防災という共通のテーマで連携できる可能性を感じて参加しました。そこでCWS Japanと一緒にになったことがその後のパートナーシップにつながりました。

—CWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

NGOと一言で言っても、様々な規模や目的、取り組みの仕方がありますが、CWS Japanは自分たちの個々の現場の活動を、しっかりと政策に繋げていこうとしている印象があります。現場での活動だけでなくアドボカシー的な柱がしっかりとしているのがCWS Japanの特徴だと思いました。政府をはじめ政策を作る側と対等なパートナーであろうという姿勢に刺激を受けました。また、CWS Japanはスフィアスタンダードなど国際基準を遵守し、これを尊重した支援を実施していることを知り、私自身もこれを学ぶきっかけになりました。こうしたCWS Japanの姿勢を知ることによって、視野を広げることができました。私たちは企業という立場上、どうしてもクライアント（発注者）を意識しながら仕事をしてしまいがちです。しかし、CWS Japanと連携することで、同じ場所にもともに立ち、現地の人々とともに、同じ方向を見ながら仕事をするという当たり前のことができていることがいいと思います。

"同じ場所にもともに立ち、現地の人々とともに、同じ方向を見ながら仕事をするという当たり前のことができていることがいいと思います。"

ー防災支援・緊急人道支援で大切にしている貴社のアプローチや課題を教えてください

以前は、災害の被災者支援というのは、発生した災害後の対応というイメージを持っていました。しかし、弊社に入社し防災に関わるようになったことで、災害による被害というのは、その災害の仕組みを知り、人々が事前に取り組むことによって未然に防ぐことができるということを知りました。こうした防災の取り組みを、現地の人々と良い近い関係にあるNGOと一緒に取り組むことができれば、より多くの人々が災害によって命を落としてしまう危険性を軽減し、その被害による苦しみを和らげることができると思います。例えば、災害情報などの知りえたことを知らなかったために命を落とす人をなくしていきたい、と思います。

写真：

CWS Japanとの事業で
訪問したパキスタン現
地でのワークショップ
の様子



ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはありますか？

より多くの防災の協働事業を、一緒に創れると嬉しいです。

"防災の取り組みを、現地の人々と良い近い関係にあるNGOと一緒に取り組むことができれば、より多くの人々が災害によって命を落としてしまう危険性を軽減し、その被害による苦しみを和らげることができると思います。"

眞弓孝之 様、中村清美 様、インタビューへのご協力ありがとうございました。

今後、インタビュー記事を定期的に皆様にお届けしたいと思いますので、是非ご高覧ください。

(聞き手・文：プログラム・マネージャー 五十嵐 豪)

特定非営利活動法人CWSJapan

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：

public@cwsjapan.jp

電話：

03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)